

狂気と病い

—Melville の逸脱者たちの「力」について—

西田みさお

しばしば論じられているように、*Redburn* に登場する Jackson から Ahab への系譜をたどることは決して難しいことではない。ともに神を恐れぬ悪魔のごとき存在とみなされ、肉体、あるいは精神の病に冒された健全者の世界からの逸脱者でありながら、周囲の者たちに恐るべき「力」を振るう。本来ならば、肉体や精神を冒された者は、その「力」を失うか、弱められてしまうことだろう。しかし、奇妙なことに、Jackson と Ahab においては、逆にそれが強められているように思われるのだ。では、狂気と病というこの二つの究極的な負の要素は、いかにして彼らに「力」をもたらし得たのだろうか。

まず Jackson について見ていこう。黄熱病から回復したばかりのようにまっ黄色で、髪もほとんど抜け落ちてしまっているこの人相の悪い男は、全乗組員の中で最も虚弱な肉体をしており、まだほんの少年であった *Redburn* にさえ投げ飛ばせそうなほどであった。しかし、サタンでも逃げ出すかと思われるほど威圧的で、「この世のありとあらゆるもの、ありとあらゆる人間に対する憎悪に満ちているようにみえた。その様子はまるで世界が一人の人間で、彼に恐ろしい危害を及ぼし、その思いが今も心に疼いているといった風であった」(R 61)。⁽¹⁾ 彼は、とりわけ、美と力に溢れたものを憎悪し、アイルランド出身の筋骨たくましい快活な若者などは、Jackson に絶えず罵倒され、冷たく鼻であしらわれていたが、*Redburn* は、この若者が人並みすぐれた体力を持つ好人物であったがために Jackson に憎まれていたのだろうと考える。*Redburn* 自身もその例外ではな

く、刃向かえば徹底的に罵られ、常に邪悪な悪意のこもった目で睨まれていた。ここには、健康な者が、それを逸脱した者に蔑まれ、その支配下に置かれるという奇妙な逆転が見られる。

さらに批評家の Paul McCarthy は Jackson が moral insanity にも冒されていると考える。moral insanity は 19世紀の半ば頃イギリスの医師 James Prichard によって紹介された概念で、一時精神医学におけるスタンダード・コンセプトであった。McCarthy の引用した *Penny Cyclopaedia* によると、moral insanity とは「感情や活動力が病的な倒錯状態に陥ることであるが、幻覚をとまったり、誤った信念が頭に刻み付けられることはなく、時には知的能力が全く損なわれていないように見える場合もある。」⁽²⁾ 言い換えれば、これは「主として感情を冒す精神病のことで、認識力を冒すこともあり、その症状は感情の欠如、減少から、憎しみ、恐怖、メランコリーの顕著な露呈に至るまで様々である。」⁽³⁾ また、反社会的であり、他人の権利を完全に無視するというのもこの病いの特徴であるが、McCarthy は、こうした moral insanity の特徴が Jackson に見られると主張する。例えば、「彼は批判や嘲りの対象としてしか、他の船乗りに興味を示さず、因習的なモラルや宗教の規範に何の敬意も払わない。彼はただ、そうした規範やそれを支持する人々を軽蔑するのみである。また、非常に批判的で傲慢でありながら、時折、不意に無感動になり、『陰鬱な狂気にとらわれた人間のように黙り込むこともあった』(R 58)。彼の抱えている問題は主として感情的な問題であるが、その主なものは強い憎しみであり、それが目に見えるすべての態度と行動に浸透し、影響を与えているのだ」⁽⁴⁾ と McCarthy は述べているが、こうした特徴は確かに Jackson において顕著である。

Redburn 自身 Jackson の正気を疑ったこともある。

Sometimes I thought he was really crazy; and often felt so frightened at him, that I thought of going to the captain about

it, and telling him Jackson ought to be confined, lest he should do some terrible thing at last. (R 61)

Redburn はここで Jackson を「監禁」すべきだと考えている。しかし、狂人、肢体不自由者、貧困者、病人、自殺志願者、アルコール中毒患者等、「理性、道徳および社会の秩序に関して、『変調』の徴候を示す人たち」⁽⁵⁾が数多く現れる Melville の船は、それ自体がすでに一種の *asylum* ではなかったか。例えば、Redburn が航海に乗り出した主たる要因は貧困であったし、*Moby-Dick* の Ishmael にとって航海とは「ピストルと弾丸の代用品」(*MD* 12)⁽⁶⁾であった。Pequod 号の鍛冶屋 Perth は酒で身を滅ぼし、やはり死を選ぶ代わりに捕鯨船に乗り込んでいる。さらに、*White-Jacket* においては、軍艦は文字通り *asylum* にたとえられている。

The Navy is the asylum for the perverse, the home of the unfortunate. Here the sons of adversity meet the children of calamity, and here the children of calamity meet the offspring of sin. (*WJ* 74)⁽⁷⁾

このように、Melville の描く船は多分に *asylum* のような性質を帯び、*Highlander* 号もその例外ではなかった。つまり、狂った病人である Jackson と同様、貧困者 Redburn もすでに監禁されていたのである。したがって、ともに船上にあるかぎり、Jackson から逃れる術はなかった。

しかしながら、*Highlander* 号を支配していたのは、実は Jackson だけではなかった。彼以上に水夫たちを脅えさせたもの、それは死であった。泥酔したまま船に担ぎこまれ、せん妄状態 (*delirium tremens*) に陥って荒れ狂い、海に飛び込んで自殺した一水夫、難破船で見かけた「三体の黒ずんだ、緑色の、こけむした」(*R* 103) 乗組員の死体、やはり泥酔状態で船に運びこまれ、一度も寢床から起き上がることなく、緑色や黄色の不気味な炎に包まれ屍と化した Miguel、そして不潔な環境に詰め込まれ、熱

病に罹って次々に死んでいった移民達。船上の誰もが死の恐怖におののいた。しかし、Jackson だけは別であった。例えば、Miguel が死んだ後、皆船首楼に一人でいるのを嫌がったのだが、彼は「あの運命の場所の方を向いて、咳をしたり、笑ったりしながら、死んだ男に対しとんでもないやじや嘲りの言葉を浴びせかけたもの」(R 246) だった。また、移民たちが次々と死んでいき、皆が恐慌に陥っていた時も、ただ一人 Jackson だけは超然としているように見えた。

Jackson...seemed elated with the thought, that for *him*—already in the deadly clutches of another disease—no danger was to be apprehended from a fever which only swept off the comparatively healthy. Thus, in the midst of the despair of the healthful, this incurable invalid was not cast down; not, at least, by the same considerations that appalled the rest. (R 289)

これほどまでに死に取り巻かれ、自らも不治の病に冒されながら、微塵も死を恐れず呪阻をはき続ける無神論者に、ただでさえ迷信深い水夫たちが恐怖を感じるのも無理はない。⁽⁸⁾ だが、その Jackson にもついに最期が来る。激しい呪いの言葉をはくや否や、彼は帆一面に血をはいて、帆桁から真っ逆さまに海へ落ちたのだ。Jackson は二度と浮かび上がってこなかった。ついに死が彼をとらえたのだ。それにしても、その後の乗組員たちの対応はあまりにも冷淡であった。救助は不可能と悟ってか、運転士はただ仕事の続行を促すのみ。また、他の水夫たちは死んだ Jackson のことに触れようとせず、皆が暗黙のうちに示し合わせて Jackson の思い出を揉み消してしまっただけのように見えた。Redburn はさらに「彼の死が皆の救いになったことだけは確かだ」(R 297) と語っている。Jackson が「水夫たち一人一人を束縛していた力の激しさが、皆の心の奥底までも蝕んでいた」(R 296-7)かどうかは定かではないが、彼の死が水夫たちの救いにな

ったことから考えると、彼の振るっていた「力」は、主として彼の presence, つまり彼がそこにいるという事実と関係しているように思われる。特に, Redburn が繰り返し言及しているように、その蛇のような目と呪いにみちた言葉が効果的に機能しているように思えるのだ。しかも、この二つの機能は、彼の病状が悪化していくにつれて、ますます恐ろしい効果を発するようになる。

Every day this Jackson seemed to grow worse and worse, both in body and mind. He seldom spoke, but to contradict, deride, or curse; and all the time, though his face grew thinner and thinner, his eyes seemed to kindle more and more, as if he were going to die out at last, and leave them burning like tapers before a corpse. (R 104)

また別の箇所では、次のような表現も見られる。

The weaker and weaker he grew, the more outrageous his treatment of the crew. The prospect of the speedy and unshunable death now before him, seemed to exasperate his misanthropic soul into madness; and as if he had indeed sold it to Satan, he seemed determined to die with a curse between his teeth. (R 276)

生きている限り、Jackson は暴君として船員たちの上に君臨し続け、冒瀆的な言葉を吐くのをやめようとしなかった。また、彼の肉体的苦痛は彼の憎しみと軽蔑の念を深め、その結果彼の目はますます不気味な効果を発するようになったのである。しかし、結局、彼にはその「邪悪な魔力の虜となった者すべてを、ともに地獄にひきずりこむ」(R 276) だけの「力」はなかった。それどころか、少年 Redburn にとっては、Jackson の死は、リバプールで見かけた母親とその子供達の死と並ぶ一つの体験でしかなかったように思えるのだ。

これに反して、Ahab の狂気はすべてを巻き込んだ。McCarthy は、*Moby-Dick* においては「白鯨と同様狂気も遍在」⁽⁹⁾ していると述べている。それは特に船上や海において顕著であり、例えば、Pequod 号はしばしば melancholy, monomaniac という言葉で形容され、時には “the material counterpart of her monomaniac commander’s soul” (*MD* 354) と見なされることもあり、白鯨は Ahab の目には、 “the monomaniac incarnation of all those malicious agencies which some deep men feel eating in them, till they are left living on with half a heart and half a lung” (*MD* 160) と映る。また、波は “the swift madness and gladness of the demoniac wave” (*MD* 202) と描写され、海は “the crazy sea” (*MD* 267) と化す。さらに、Pequod 号には、Ahab 以外にも数多くの insane characters が引き寄せられる。その主なものは、船に乗り込もうとした Ishmael と Queequeg に無気味な予言を投げかけた Elijah, 自ら大天使を名乗る Jeroboam 号の狂信者 Gabriel, 大海に一人取り残された後、神の言葉を語るようになったボーイの Pip であろう。

そして、この狂気の遍在する世界の中心に位置するのが、Ahab 船長であった。彼は狂気に冒されていることを自ら認めている。

They think me mad—Starbuck does; but I’m demoniac, I am madness maddened! That wild madness that’s only calm to comprehend itself! (*MD* 147)

Ahab が自分を demoniac と呼ぶのは、自分の目的を達成するために悪魔の力を借りようとしたためだと思われる。例えば、彼は、悪魔の名において、自分のもりに洗礼を施し、Fedallah をはじめとする五人の悪魔のようなパルシー教徒を Pequod 号に乗り込ませていた。恐らく、アレゴリーとして読めば、Ahab に影のようにつきまとう Fedallah を悪魔の化身と見なし、Ahab は悪魔に取り付かれているのだと考えることも可能である

う。しかし、より現実的な視点から見ると、彼の狂気を最も適切に表現する言葉は、やはり *monomania* ではないかと思われる。

OED は、この言葉を “a form of insanity in which the patient is irrational on one subject only” と定義している。また、*Encyclopedia of Psychology* によれば、*monomania* とは「固定観念が顕著な精神障害」であり、「たいていの場合、それ以外の点においては、患者の人格はうまく統合されているので、その幻覚体系を侵さない状況に対してはかなり正常に対応することができる。また、パラノイアを同義と見なすことも可能である。」⁽¹⁰⁾ 更に、McCarthy の引用した *Penny Cyclopaedia* によると、「*monomania* という用語は、M. Esquirol によって提唱され、精神障害に関する問題を扱う著述家に採用されたもので、特に次に述べるような狂気の事例を説明するために用いられてきた。すなわち、この狂気に冒された者は、幻想や誤った信念にとらわれながらも、その妄想の対象と無関係の事柄に関しては正しい判断力を持つことができるのである。」⁽¹¹⁾ つまり、重要な点は、*moral insanity* と同様、その *moral insanity* から発展したと考えられる *monomania* もまた患者の知性を損なわずに起こり得るということである。

Ahab は、自分の狂気の性質をある程度認識していたと思われるが、それは次の Ishmael の説明からも明らかである。

Now, in his heart, Ahab had some glimpse of this, namely: all my means are sane, my motive and my object mad. Yet without power to kill, or change, or shun the fact; he likewise knew that to mankind he did long dissemble; in some sort, did still. But that thing of his dissembling was only subject to his perceptibility, not to his will determinate. (*MD* 161)

言い換えれば、Ahab は、白鯨に対する復讐という狂気にかられながらも、Pequod 号の owner に対しては正気を装い、また船を操り、乗組員を指

揮する全能力を保持していることが可能であったのだ。

では、これから **Ahab** が狂気にいたる過程を見ていくことにしよう。批評家たちが指摘するとおり、**Ahab** が狂気にいたる過程は少なくとも二つの段階に分けることができる。⁽¹²⁾ すなわち、白鯨に足を食い切られる前とその後である。彼の狂気の起源をたどっていくと、彼が一歳になる前にこの世を去った狂った母親に行き当たる。**Ahab** は、この寡婦の母親に、犬に血をなめられた邪悪な偶像崇拝者の名を与えられ、インディアン女にその呪われた運命を予言されたのである。彼の幼少期に関しては詳しい記述がないが、このように呪われた出生が彼のその後の心理状態に何らかの影響を与えたというふうに考えられなくもない。**Ahab** は、自らの生涯を「40年間の窮乏、危難、嵐」と称し、自分は「40年間平和な地上を捨て、冷酷な海にあって深海の恐怖と戦ってきたのだ」と語る (*MD* 443)。そして、おそらくはその孤独をいやすために、50を過ぎて、**Ahab** は少女のような妻を娶るのだが、婚礼の翌日には再び海に出てしまう。結婚と同時に妻を寡婦にしてしまったと語りながら、**Ahab** は自らの狂気に言及する。

I widowed that poor girl when I married her, Starbuck; and then, the madness, the frenzy, the boiling blood and the smoking brow, with which, for a thousand lowerings old Ahab has furiously, foamingly chased his prey—more a demon than a man! (*MD* 443-4)

このように **Ahab** はすでに何十年もの間、狂ったように鯨を追い続けてきたのである。しかしながら、先程の *monomania* がついに **Ahab** をとらえたのは、白鯨に足を食い切られ、その後何カ月もハンモックに横たわっていた時であった。このとき、彼の引き裂けた肉体と傷ついた魂とが互いに血を流し、混じり合って、ついに *monomania* となったのだ。これによって、**Ahab** の生来の知性が損なわれることはなかったが、かつて **Ahab**

の精神の **agent** であったはずの知性は、狂気の **instrument** におとしめられた。そして

...his special lunacy stormed his general sanity, and carried it, and turned all its concentrated cannon upon its own mad mark; so that far from having lost his strength, Ahab, to that one end, did now possess a thousand fold more potency than ever he had sanely brought to bear upon any one reasonable object. (*MD* 161)

この **special lunacy** による **general sanity** の強襲は **Ahab** の内部だけで収まらず、やがて **Pequod** 号全体にも及んだ。このあたりの「力」の流れ、あるいは構造は、**Jackson** の場合と一見非常に似通っているように見える。しかし、そこに流れる「力」の質は実は全く異なるものである。つまり、**Jackson** が乗組員に対して振るった「力」は **corrosive power** とでもいうべきもので、彼らの「力」を蝕み、萎縮させるものであり、言い換えれば、相手に恐怖を植え付け、相手の「力」を弱めることで、相対的に自分の「力」を強く見せかけることができたのではないかと思われるが、それに対し、**Ahab** の「力」には乗り組員たちを彼と同様 **frantic** にさせ得る **magnetic** な性質があった。例えば、第36章の **The Quarter-deck** のシーンでは、**Ahab** が全乗組員に向かって発した “**What do ye do when ye see a whale, man?**” (*MD* 141) という一見無意味な質問は乗組員たちの間に強い感動を引き起こすが、それはまるで **Ahab** の磁力に引き込まれたようであったし、**Ahab** の真の目的が告げられた後でも、一等航海士らを除く船員たちの熱狂は容易に冷めやらず、**Ishmael** などは “**Ahab’s quenchless feud seemed mine.**” (*MD* 155) とさえ語っている。このように、**Ahab** の「力」は、乗組員たちの「力」を沸騰させ、自らの「力」と融合させることもできたのだ。白鯨追跡の二日目ともなると、彼らは文字どおり **Ahab** の狂った目標に向けて一体となる。

They were one man, not thirty. For as the one ship that held them all...all the individualities of the crew, this man's valor, that man's fear; guilt and guiltlessness, all varieties were welded into oneness, and were all directed to that fatal goal which Ahab their one lord and keel did point to. (*MD* 454-5)

しかし、それ故かえって Ahab の狂気は、孤独に死んだ Jackson とは対照的に、その狂気に魅いられた者すべてを道連れにすることになる。

いずれも神を恐れぬ悪魔のごとき存在である点には変わらない。が、敢えて Jackson と Ahab の「力」に質的な差があらわれた原因の一つを求めるとすれば、一方は「世界の最悪の場所でありとあらゆる道楽と放蕩の限りを尽くしてきた」(*R* 57) あげく、ついには *moral insanity* に冒され、「汚らわしい人間の滓」(*R* 58) となりはてたのに対し、他方は40年もの間幾多の危難も顧みず、ただひたすら鯨を追い続けてきた男であり、その一徹さが憎しみ故に *monomania* に転じた後もなお目に見えぬその磁力で周囲の「力」を引き付けたことであるかもしれない。が、重ねて繰り返すが、Ahab がその「力」の使い道を誤ったことだけは確かだ。

注

* 本稿は、日本英文学会第64回大会（1992年5月23日、於西南学院大学）での口頭発表をもとにしている。

- (1) Herman Melville, *Redburn: His First Voyage*, eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston and Chicago: Northwestern Univ. Press and The Newberry Library, 1969), 以下引用の頁数は全てこの版により、省略されたタイトルとともに括弧内に記す。
- (2) Paul McCarthy, “*The Twisted Mind*”: *Madness in Herman Melville's Fiction* (Iowa City: Univ. of Iowa Press, 1990) 15.
- (3) McCarthy 15.
- (4) McCarthy 39.
- (5) ミッシェル・フーコー, 『精神疾患と心理学』, 神谷美恵子訳 (東京: みすず書房, 1970) 119.
- (6) Herman Melville, *Moby-Dick; Or, The Whale*, eds. Harrison Hayford and Hershel Parker (New York and London: W. W. Norton & Company,

1967), 以下引用の頁数は全てこの版により, 省略されたタイトルとともに括弧内に記す。

- (7) Herman Melville, *White-Jacket: or The World in a Man-of-War*, eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston and Chicago: Northwestern Univ. Press and The Newberry Library, 1970).
- (8) 水夫の迷信深さについては, 当時の『ハーパース・マガジン』の中でも述べられているので引用すると, “With slight powers of observation, and still less reflection, the sailor is not an adept at tracing causes. Most things beyond the range of the familiar are a mystery to him—hence he is easily imposed upon. Continually exposed to perils of great moment, from habit he becomes bold and daring, as regards physical dangers; but at the same time he is the veriest slave of superstitious fear. . . .” “The Superstition of Sailors,” *Harper’s New Monthly Magazine* 92 (January 1858): 183.
- (9) McCarthy 57.
- (10) H. J. Eysenck, W. Arnold, and R. Meili, eds., *Encyclopedia of Psychology*, 3vols. (London: Search Press, 1972). vol. 2.
- (11) McCarthy 16.
- (12) Ahab が monomania に至るまでの経緯を McCarthy は3つの段階に分け, Henry Nash Smith は2つの段階に分けている。McCarthy 67-70, Henry Nash Smith, “The Madness of Ahab,” *Yale Review* 66 (Autume 1976): 14-32, 参照。